

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン



*mico tama*

帝京大学総合博物館  
多摩のヨコガオ発見プロジェクト  
フリーマガジン 2021 第2号

## 水がつなげる多摩の物語



水と生きる

奥多摩と東京の水がめ

多摩川の自然と歴史

武蔵野湧き水めぐり

水に親しむ



### 表紙写真

朝顔の里 (14 頁掲載) を取材した際に、近くを流れる矢川を散策しました。川が流れ出す木陰に入ると、水の流れる澄んだ音だけが聞こえます。しばらく聞き入っていました。(2021 年 4 月 9 日)

### 本誌の編集について

本誌『ミコタマ』は、帝京大学総合博物館(帝京大学八王子キャンパス内)で展開中の「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」の一環として作成しています。プロジェクトについては裏表紙をご覧ください。本誌の企画・取材・文章執筆・デザインは、帝京大学総合博物館の指導のもと、すべて帝京大学に在籍する学生が中心に行っています。

## Contents

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン



帝京大学総合博物館  
多摩のヨコガオ発見プロジェクト フリーマガジン 2021 第2号

### 「ミコタマ」の名前の由来

ミコタマとは、ラテン語の「輝く」という意味のミコ (Mico) と多摩地域のタマ (Tama) を合わせた言葉です。キラリと輝く多摩の魅力を本紙を通じて記録し、発信したいとの思いを込めました。

### 帝京大学総合博物館について

本館は 2015 年 9 月に帝京大学八王子キャンパス内に開館した博物館です。帝京大学の持つ貴重な学術資料や最新の研究成果を、展示や講座などを通じて社会に広く公開しています。どなたでも入館できます。ぜひお越しください。

- Web サイト : [https://www.teikyo-u.ac.jp/campus/hachioji\\_campus/museum](https://www.teikyo-u.ac.jp/campus/hachioji_campus/museum)
- Twitter (@Teikyo\_Museum) : [https://twitter.com/Teikyo\\_Museum](https://twitter.com/Teikyo_Museum)
- Instagram (@teikyo\_museum) : [https://instagram.com/teikyo\\_museum/](https://instagram.com/teikyo_museum/)
- YouTube : <https://youtube.com/channel/UCFAxF-ST2oZoyFkrc3SFU-Q>



朝顔の里(14頁掲載)のすぐ前を流れる府中用水。カモが水の中に何度も顔をつっこんでいる姿がかわいい。(2021年4月9日)

## 特集 水がっなげる多摩の物語

### part 1 水と生きる

09 川のごみから見える世界

14 湧き水と清流のほとりの農園  
朝顔の里を訪ねる

### part 2 奥多摩と東京の水がめ

20 東京の水がめを見に行く  
「奥多摩むかし道」一日登山

### part 3 多摩川の自然と歴史

26 35 + 103 km先の景色  
多摩川最初の一滴が落ちる場所

28 多摩川×散歩 私の知らない魅力を探しに  
29 多摩川×散歩 耳をすませばの聖地をめぐる

30 江戸の大事業 羽村取水堰

31 「人間失格」〜太宰治の最期を訪ねる〜

### part 4 武蔵野湧き水めぐり

33 お鷹の道・真姿の池湧水群  
〜湧き水の聖地とその魅力〜

34 竹林公園 竹と湧き水

35 心安らぐ湧き水 ママ下湧水公園

36 からきだの道 緑豊かな多摩の自然

### part 5 水に親しむ

38 雨の日に読みたくなる話

39 暑い夏をのり切ろう！  
ジョギングと水分補給

40 美しい自然 瓜生緑地

41 自然の中の鏡 多摩中央公園きらめきの池

42 水の中の小さな世界

43 水の世界の掃除屋さん  
知られざるタニシの生態 これからのタニシ

### ◆ミコタマ通信

48 47 46 ミコタマ編集部ニュース  
編集後記  
キャンパス自然観察だより〜キャンパスの「梅仕事」



⑭ 帝京大学駅伝部(p,39)  
中野孝行監督インタビュー



② 朝顔の里(p,14)  
国立市泉 5丁目



⑩ 竹林公園(p,34)  
東久留米市南沢  
1丁目7



⑧ 太宰治入水の地(p,31)  
三鷹市下連雀  
3丁目6-54



⑨ お鷹の道  
真姿の池 湧水群(p,33)  
国分寺市東元町 3丁目



⑪ ママ下湧水公園(p,35)  
国立市矢川  
3丁目12



⑱ 帝京大学総合博物館  
『ミコタマ』編集部活動拠点  
八王子市大塚359  
帝京大学八王子キャンパス



⑥ 「耳をすませば」聖地巡礼(p,29)  
多摩市桜ヶ丘 他



① よみがえれ大栗川を楽しむ会(p,9)  
多摩市関戸

# 今号の取材マップ

イラストマップ作成=中田美涼(心理学科3年)

※◎のイラストのみ海老沼美琴(社会学科2年)作成



④ 多摩川源流 水干(p,26)  
山梨県甲州市



⑦ 羽村取水堰(p.30)  
東京都羽村市  
羽東3-8-32



③ 小河内ダムと奥多摩湖(p,20)  
奥多摩町



⑰ 水の中の微生物(p,42)  
多摩市乞田



⑱ タニシの生態(p,43)



⑫ からきだの道(p,36)  
多摩市唐木田1丁目  
50-1



⑤ 多摩川と小野神社(p,28)  
多摩市一ノ宮 他



⑬ 雨の日に読みたくなる本(p,38)



⑯ きらめきの池(p,41)  
多摩市落合2丁目  
35-8-5



⑮ 瓜生緑地(p,40)  
多摩市永山  
5丁目



特集

## 水がつなげる多摩の物語

帝京大学八王子キャンパスで過ごしている私たちが、  
多摩の魅力に出会い、  
その魅力をたくさんつめて、  
読者の皆様にお渡しする「ミコタマ」。

第2号の特集について編集会議で話し合った際に、

日野市出身の編集部メンバーが、

「多摩地域には湧き水がたくさんある」  
ことを教えてくれました。

その言葉が発端となり、  
水に関わる多摩の魅力を取材し  
まとめることになりました。

多摩川や、その支流。

こんこんと湧き出る水。

それらについてじっくり考えることは

日常生活ではあまりありませんでした。

まずは自分たちの目で確認することから始めた私たち。  
どんなものを見ることができたでしょうか。



朝顔の里の皆さん。湧き水を使ってアサガオを栽培している。(14 頁掲載)

part 1

# 水と生きる

昔も今も

人は水と関わって生きています。

関わり方は、人それぞれです。

それを知るために、

水と深く関わっている方々の話を

聞かせて頂きました。

そこからは、

人それぞれの水との関わり方、

そして人としての生き様が

見えてきます。



# 川の ごみから見える世界

工藤玲奈（経営学科3年） 文  
寺澤頼来（心理学科3年） 写真



“川を楽しむ”をテーマに、東京都多摩市で活動している「よみがえれ、大栗川を楽しむ会」。2002年から活動をスタートし、大栗川にいる生き物の調査や川の清掃活動、水辺まつりなどを行っている。

ミコタマの特集テーマが「水」に決まったとき、思い浮かんだのは住んでいるアパートの近くを流れる「大栗川」だ。私は山形県から上京し、初めて家の近くに川がある生活を送っている。朝早く川へ散歩に行くこともあれば、夕方に少し遠くのスーパーまで川沿いの道を通り、買い物に行くこともある。夏の終わりのある日の夜、何気なく川沿いを歩いていると、見たことのない黒い物体が私の横を通り過ぎていった。よく見るとコウモリだ。東京にもコウモリがいるのだと驚いた。

そこで、大栗川や、そこにいる生き物についてもっと知りたいと思い、多摩市で活動している「よみがえれ、大栗川を楽しむ会」の代表である相田幸一さん（79歳）にお話を伺った。



大栗川は東京都八王子市と多摩市を流れる多摩川水系の一級河川。この川で、ある夜にコウモリを見かけた。

## 大栗川での活動の始まり

30年ほど前から森林保全活動を行ってこられた相田幸一さん。全国の森林の状況を調べて、それを政府や一般市民に発信する「国民森林会議」の会員となり、森林の手入れを行う活動に参加していた。当時から多摩地域に暮らしていたが、自宅と仕事場との往復の毎日で、「あまり地域のことを知らないな」とふと気づいた。40代後半になり、多摩のことを知ろうと大栗川についての講座を受講したのがきっかけで、「よみがえれ、大栗川を楽しむ会」に参加した。森を知るには、森を通して川や海のこと、そしてすべての自然環境を考えなければいけないと思っただ。その繋がりで大栗川についてもっと深く知ろうと思ったそうだ。

この会は2002年に発足し、「川を楽しむ」をテーマに活動が続いている市民団体で、今年で19年目になる。相田さんは2005年頃から二



「よみがえれ、大栗川を楽しむ会」の代表の相田幸一さん。30年ほど前から環境保全の活動をおこなってこられた。

代目の代表として活動している。「メンバーの皆がしっかりしているから続けてこられた」と笑って話す。

40・50年前は大栗川について誰も関心を示さない状況だった。「ドブ川」と呼ばれ、非常に汚い川だったという。排水がそのまま流されて、泡がブクブク浮いていた。その影響で生き物もいなくなっていたそう

だ。住宅や事業所に義務付けられた浄化槽の設置が普及すると、やや川は綺麗になり、さらに排水が污水処

理場で処理されるようになると、より一層、川が綺麗になってきた。川が綺麗になることで、生き物が戻ってきたり、川岸に草花も咲いたりするようになった。それでも、大栗川は汚いものだというイメージが現在でも残っている。「川の魚なんか取って食べるか」という雰囲気は今もあるそうだ。

相田さんたちが大栗川を拠点とすることにしたのは、多摩の自然環境に関心を持つ人々が集まる多摩市民

環境会議に所属していたことがきっかけだった。その会議で、当時の市議会議員の方に「東京都で将来的に川の護岸改修をするだろうから、大栗川について皆で考えようよ。」と声をかけられた。そしてできたのが、この会の前身である「大栗川を考える会」だ。

水質や護岸を調べ、どんな植物や動物がいるかを調査した。もっと市民に働きかけられるような行動を起こさなければいけないと思い、会の名前を、親しみやすくなるように「大栗川を楽しむ会」に変えた。さらに「よみがえれ」という言葉をつけて「よみがえれ、大栗川を楽しむ会」ができたという。

大栗川は汚いという地域の人々の認識を変えるために、子どもたちを含めた近所の人たちと川で遊ぶことで川に親しんでもらおうと、行動を起こした。まず、2003年に川のマップをつくった。次に、自分たちでつくったイカダに乗って、短い距



大栗川の周辺から拾い上げたごみ。家庭ごみから産業ごみまで、ありとあらゆるごみが集まった。



川で食べたり飲んだりした際に出るペットボトルや缶のごみが多かった。



産業ごみも多い。工事現場や近隣の農地から、雨風によって流れてきてしまうことがあるようだ。

へ向かって清掃活動を行う。  
 胴長靴とトングをお借りして、川に入る。まだ寒さが残り、少し雨が降っていたため、胴長靴を通して水の冷たさを感じる。ごみを拾うために川に入ったのだが、「あまりごみは落ちていないんだな。」というのが最初の印象だった。しかし、川の奥まで歩みを進めると、その印象は大きく変わった。草の茂みに隠すように置かれていた畳のようなごみ、

うことがあるといふ。  
 家庭ごみは家庭ごとにごみ袋に入れられ回収されているので、そう多くはないという。しかし、台風などの影響で袋ごと流れてくる可能性がある。また、スーパーやコンビニで食べ物を買った、川原で食べたりすることがある。そんなときに出るごみも多く見られるようだ。実際に

離ながら大栗川下りを楽しんだ。はじめは発砲スチロールでつくり、次はペットボトルでつくったそうだ。そして現在は川の清掃活動を中心に活動を行っている。  
**ごみはあちらこちらから**

おにぎりの包装、大量の牛乳パック、ペットボトルや缶が落ちている。  
 相田さんに川のごみについての疑問を投げかけた。「大栗川に流れているごみは、やはり川で遊んだ人々が置いていくような、おにぎりの包装などが多いですか。」すると、意外な答えが返ってきた。「確かにそれらのごみも多いけど、一番多いのは工事用のごみ、いわゆる産業ごみかな。」とのことだった。川で工事が行われているので、それに関連する産業ごみが多く流れてくるようだ。また、近くの農地から、農業用

私も、おにぎりや菓子パンの包装をたくさん見つけた。タバコの吸い殻も何本か拾った。近頃は、新型コロナウイルスの影響でマスクが流れていることも多いという。

「私たちが清掃活動をしていて気付くのは、実にさまざまな種類の消費財や生産財のごみがあることとともに、容器や包装のプラスチックごみがとても多いことです。会の清掃活動に参加する方々が増えているのは、プラスチックごみによる海洋汚染が近年注目されているからだと考えられます。」

### 川で生き続ける生命

変わっていく川の環境の中で、見ることができなくなった生き物がいるそうだが、昔から住み続けている生き物も、もちろんいる。網を使った「ガサガサ」と呼ばれる方法で水の中を探ると、小さな魚やエビが網に入った。鳥も沢山いる。くちばしが黄色く背が高いダイサギや、背が



小さく水かきが黄色いコサギは、夏場に川の真ん中で姿勢よく立っている。カルガモは一年中おり、この地域で子育てもおこなう。冬場だけ来るコガモは、帝京大学の付近の川岸で多く見られるそう。マガモはベアで来る。私が気になっていたコウモリは、住みかから川にいる虫を食べるために来るのだそう。夏場では多摩川との合流地点にある交通公園付近に多く飛んでいるという。春にはツバメも来るそう。

相田さんに一番珍しく、「すごい」と思った生き物は何か質問してみた。当初は川の生き物について何も知らなかったため、すべてが新鮮



ガサガサをしたところ、小さな魚やエビが網に入った。水の中にはもっと多くの種類の生き物がいそう。

網を使って水の中の生き物を捕まてみる。多摩地域では「ガサガサ」と呼ばれる方法だ。

だったという。今では特に驚くような生き物はいないそうだが、その中でも珍しい生き物について教えてくれた。

まずは、カワセミ。可愛らしい姿をしており、皆が喜ぶそう。最近では、オオバンやカイツブリも見られ、個体ごとに顔が違うので観察すると楽しいとのことだ。カモは4種類ほ



川岸に咲く花の蜜を吸いに来た蝶。私の見たコウモリは、このような昆虫を食べに川まで来るようだ。



川の真ん中に留まっている、サギ。何か獲物を狙っているのだろうか。



川岸で日向ぼっこをするカルガモ。大栗川では1年中見ることができる。



相田さんと一緒に大栗川の清掃活動に参加する筆者。身近な環境を意識して日々生活することの大切さを改めて実感した。



排水の浄化や清掃活動により綺麗な川となった大栗川。綺麗な川の流れを保つための取り組みは、やがては海を綺麗にしていくことにもつながる。

どいて、その中でもオナガガモは、珍しいという。多摩川との合流地点には、タヌキやキツネもいるそうだ。

### 綺麗な街づくり

ところで、皆さんはSDGs<sup>エスディージーズ</sup>という言葉をご存じだろうか。

Sustainable Development Goalsの略称であり、日本語では「持続可能な開発目標」と訳される。2015年に国連が採択した2030年までに達成を目指す17の目標である。

「よみがえれ、大栗川を楽しむ会」

の活動は、主に14番の「海の豊かさを守ろう」という目標に繋がっていると私は考えた。身近な川を綺麗にすることは、世界的に見ればちっぽけなことかもしれない。けれど、その取り組みの一つひとつが、やがては海を綺麗にしていく。さらに、魚や鳥のすみやすい環境や、綺麗な草花が咲くまちをつくる。11番の目標の「住み続けられるまちづくり」にも繋がるのだ。

現在、新型コロナウイルスの影響でステイホームを強いられているが、その中でお母さんやお父さんが小さな子どもたちを連れて川に遊びに来る姿を見かけることが増えたように感じる。また私たちが参加した日から、多摩市役所の方々も大栗川清掃に毎回参加することになったそうだ。それについて相田さんは子どもたちを含め皆が川に親しむ機会になり、嬉しいことだと話してくれた。そもそも、川にごみが集まってしまうのはなぜだろう。それは川に対

する人々の関心の低さが原因だとも言える。今回、清掃活動に参加して、改めて身近な環境を意識して生活することが大切だと気づいた。川のごみを減らし、川にすむ動物や植物を増やすには何ができるかを、一人ひとりが考える必要があるそうだ。

### 大栗川とまちづくりへの愛

コウモリを見たことがきっかけで興味を持った大栗川だったが、相田さんのお話をきっかけに様々なことがみえてきた。特に強く感じたのは、ボランティアは奉仕活動でもあり、まちづくり活動でもあるということだ。参加している方々の一人ひとりが地元に対する「愛情」を持っている。その愛情がまち全体をより良いものにし、世界を良くすることにも繋がるのだ。少し大袈裟かもしれないが、きっとそうだと今回の活動を通して感じた。私たちも多摩地域に住む一員として、まちのことを考えて行動していかなければならない。

中央のビニールハウスが立っている場所が「朝顔の里」。周りには畑が広がり、ビルなどの高い建物がいないため、空が高く感じる。すぐ近くには、「ママ下湧水」と呼ばれる湧き水があり、清水川の源流となっている。写真中央の子供たちが遊んでいる付近は、清水川と矢川の水を府中用水に合流させるための「矢川のおんだし」と呼ばれる水路だ。澄んだ水の中には鴨や魚の姿を見ることができる。(2021年4月9日)

# 湧き水と清流のほとりの農園 朝顔の里を訪ねる



毎年7月になると、色とりどりの花を咲かせた数千鉢のアサガオがJR国立駅南口の大学通りにずらりと並ぶ。国立市に夏の訪れを知らせる「くにたち朝顔市」だ。1989年にスタートし、2021年で33回の開催を数える(2020年は新型コロナウイルスの影響で中止)。市に出されるアサガオは、JR矢川駅から歩いて15分程の場所にある「朝顔の里」で湧き水を使って育てられる。どのようにアサガオが育てられているのか、代表の佐伯雅宏さんにお話を伺った。

堀越峰之(帝京大学総合博物館) || 文・写真





左／「矢川おんだし」と「府中用水」の隣にある「朝顔の里」。  
 右上／佐伯雅宏さん。国立市で唯一の花き農家だ。  
 右下／朝顔の里でアサガオ栽培をスタートさせた頃の写真を。



### 国立市で唯一の花き農家

「くにたち朝顔市」に並ぶアサガオは全て、市内の「朝顔の里」で育てられる。その近くには「東京都の名湧水57選」の一つ「ママ下湧水」が湧き出る。その水をたっぷり使ってアサガオを育て上げる。

それを一手に担うのが代表の佐伯雅宏さん。国立市内で唯一の花き農家だ。「競合相手がいないからやりやすいよ。その代わり情報もないから、他市の花き農家との情報交換が大切。」

元々花屋だったお父様の佐伯重介さんが、花き農家を始めたそう。雅宏さんは農業を継ぐために都立農業高校に進学。卒業後は、お父様と一緒に農業を営んできた。

### 国立に夏の風物詩を

「くにたち朝顔市」の始まりは、市議会議員の方々が台東区で開催している入谷の朝顔市を視察し、国立

でも朝顔市を開催しようと提案した事がきっかけだったそう。

そこでアサガオ栽培に挑戦してもらう農家を募ったところ最初は手が挙げがなかった。しかし最終的に5件の農家が手を挙げ、その中に佐伯さんのお父様もいた。「変わったことをやるのは怖いから、みんな手を挙げなかったんじゃないかな。でもやってみたら、種まきから3ヶ月という短い期間で出荷ができ、実入りが良かった。」

農家の皆さんはアサガオ栽培をスタートするにあたって「朝顔・鉢物研究会」を結成。佐伯さんも参加し、入谷の朝顔農家からアサガオ栽培の技術を学んだそう。不安は感じなかったのかと質問すると、「大変さより面白さを感じた」と当時のワクワク感を思い出したように、佐伯さんの表情が輝いた。

国立でのアサガオ栽培に見通しが立つと、栽培用のビニールハウスを建設し、「朝顔の里」と名付けアサ

ガオ栽培がスタート。20年ほど前に現在の場所に移転した。

栽培が安定するようになると最盛期は9千鉢を育て、大阪の朝顔市にも出荷していた。現在は4千鉢のアサガオを熟練のパートさんたちと一緒に育て上げている。

現在、栽培するアサガオは2種類。花の縁が白く抜け、コントラストが鮮やかな「富士」と最大で18センチに



上品な茶色の朝顔。「団十郎」と呼ばれ「暁」の中でも人気の色だ。(2021年6月23日)



コントラストが鮮やかな「富士」。花の縁が白く抜け鮮やかだ。(2021年6月23日)

もなる大輪を咲かせる「暁」。佐伯さんと朝顔市の実行委員の方々が選んだものだ。佐伯さんの好きなアサガオの色を聞いてみた。「白はいいですね。茶色も人気で、市川団十郎が使っていた手ぬぐいの色に似ているので「団十郎」っていうんですよ。」

### 「良いアサガオ」を育てる

大きな花を咲かせるのが「良いアサガオ」だと言われる。そのためには「土づくりが7割」と言い切る佐伯さん。土は落葉と赤土を混ぜ、2年かけて熟成させたものを使う。pH管理も重要だ。酸性が強すぎると栽培には向かない。アサガオ栽培は2年前から始まっているのだ。

種まきは暖かいビニールハウスの中で4月中旬に行う。家庭では気温が上がる5月中旬にまくが、7月の朝顔市に見ごろの花が咲くように少し早めに着手する。パートさんたちが苗を育てるケースに種をまいていく。均等に手際よくまけるよう使っ



上／落ち葉と赤土を混ぜ、2年かけて作られた土。(2021年4月21日)  
中／穴の中に一つずつ種を入れる。道具は手作りだ。(2021年4月21日)  
下／芽吹いた双葉を鉢に植え替える。(2021年4月28日)



種まきの1週間後に一斉に双葉が顔を出す。(2021年4月28日)





右上／アサガオ栽培を初めた頃の写真。かつては葦を使って行燈を作っていた。右下／ツルをプラスチックの行燈に巻き付ける。(2021年6月23日)  
左／湧き水を汲み上げての水やり。朝と昼の2回行う。(2021年6月23日)

ているスチロール製のシートは試行錯誤を重ねて手作りしたものだ。

約1週間で鮮やかな緑色の双葉が土から一斉に顔を出す。これが、アサガオの苗だ。それを6寸の鉢に均等に4本ずつ植える。大きな花を咲かせるための最適な本数だそう。立川にある東京都農業試験場の田旗裕也さんの研究で分かった。「植え替えやってみるかい」とパートさんからお声がけ頂き、二つ返事でやってみた。やる気はあるのだが、スピートがまるで違う。私が1鉢終える間に、パートさんは2鉢終わっていた。

苗の植え替えが完了しても気は休まらない。くみ上げた湧き水を使って毎日水やりをし、病気や害虫の被害がないか見回りをする。

ビニールハウス内の温度の調整も重要だ。4月下旬の朝晩はまだ冷え込む日もある。苗が寒すぎて傷まないよう、ビニールハウス内の温度を19度以上に保つように暖房を入れる。さらに花が咲く40日前に気温が

25度以上の日が4日続くと一番大きな花が咲くそうで、これも温度の調整が重要な理由の一つだ。

5月中旬には、どんどん伸びるツルを巻き付けるための行燈あんどんを鉢に立てる。その素材はプラスチックだが、かつては、風情を出すため霞ヶ浦の葦を使って行燈を作っていたそう。現在は葦が輸入中心に代わり身近で手に入らなくなったため、泣く泣く断念したそう。

6月中旬には花が咲き始めるが、余計なつぼみは摘み取ってしまう。また、ツルの本数を増やし、つぼみを沢山付けさせるための「摘芯」は行わない。つぼみの数を絞る事によって残したつぼみに栄養を集中させて、大きな花を咲かせるための工夫だ。この時期のビニールハウス内の気温は40度を超える。少し動いただけでも汗が噴き出る。楽な作業ではない。こうして手間暇かけて育て上げられたアサガオは、大輪の花を咲かせて朝顔市にお目見えする。

\*\*\*

「街を歩いていたり、車で走ったりしているときに、うちのアサガオが玄関先に置いてあるのを見つけると嬉しいですね。行燈を追加したり工夫している家もあります。喜んでもらっているようです。」佐伯さんは顔をほころばせる。

2021年のくにたち朝顔市は、規模を小さくし開催された。当日の天気はあいにくの雨だったが、早朝からアサガオを買い求める人が絶えなかった。こうして佐伯さんたちの笑顔と思いが詰まったアサガオは各家庭に持ち帰られる。そして、毎朝沢山の花を咲かせ人々を笑顔にしていることだろう。



2021年のくにたち朝顔市は規模を縮小して開催された。雨のなか、多くの方がアサガオを買い求めていた。(2021年7月4日)



ビニールハウス一面に並べられた出荷直前のアサガオ。あとは、くにたち朝顔市の開催を待つのみだ。(2021年6月23日)



新緑がまぶしい奥多摩湖。(20 頁掲載)

 part 2

# 奥多摩と 東京の水がめ

水道の蛇口をひねると出てくる

飲料水。

この水はどこから

来ているのでしょうか。

その水源の1つ

奥多摩にある、

小河内ダムと奥多摩湖を訪ねました。

# 東京の水がめを見に行く

## 「奥多摩むかし道」一日登山

魯 娜（観光経営学科3年）|| 文

張小寒（観光経営学科4年）|| 写真

堀越峰之（帝京大学総合博物館）|| 文・写真

甲田篤郎（帝京大学総合博物館）|| ガイド

奥多摩むかし道の終盤にある、「西久保の切り返し」。それまでは、歩きやすい舗装された道が続いているが、ここからは本格的な登山道になる。奥多摩むかし道の踏ん張りどころのひとつだ。

留学生の私が日本に来てびっくりしたことの一つが、水道水がおいしいことだ。この水は一体どこから来るのだろうか。その水源を調べてみると、どうやら利根川と荒川から来る水と、奥多摩町にある小河内ダムおこうちによってつくられた、奥多摩湖（正式な名前は小河内貯水池）から来る水があるようだ。私の住んでいる多摩地域に水源があるとは知らなかった。奥多摩湖の写真を見るとたくさんの自然に囲まれている。自然が好きな私はこの機会に行ってみることにした。さらに調べるとJR奥多摩駅から奥多摩湖まで続く「奥多摩むかし道」と呼ばれるハイキングコースを見つけた。この道は、江戸時代には江戸と甲府を結ぶ青梅街道として使われており、かつては、多くの人や物が行き来していたそうだ。今回、私たちは時代を超えて、江戸時代の人々を想像しながら、約10キロの道を4時間かけて、奥多摩湖を目指し、歩くことにした。

●奥多摩むかし道 JR奥多摩駅から奥多摩湖まで続くハイキングコース。  
江戸時代には青梅街道と呼ばれ、江戸と甲府を結んでいた。

・総距離 約10km(奥多摩駅→奥多摩湖)・所要時間 約4時間(往路)

奥多摩駅《1分》入口《20分》槐木《17分》桧村橋《15分》不動の上滝《22分》  
いろは楓の巨樹《10分》惣岳の不動尊《5分》しだら吊橋《16分》道所吊橋《13分》  
西久保の切り返し《1時間》青目立不動尊《16分》小河内ダム  
※奥多摩町総合観光パンフレットを参考に作成



～オレンジ色が奥多摩むかし道。固有名称の下に赤いラインが引いてあるのが、今回本誌に掲載したスポット。



●時代を超えたお休みどころ

1. 羽黒坂を登り切った場所にある「槐木」。昔も今も休憩ポイントだ。
2. 槐木の傍らには馬の安全を祈願する馬頭観音がまつられている。

●奥多摩湖への片道4時間の旅スタート

1. 午前9:00にJR奥多摩駅からスタート。初春の風が心地よい。
2. 氷川橋を渡る。右に見える3本杉の推定樹齢は650年。
3. いよいよ山道に入る。馬や馬車が苦労して上り下りした羽黒坂を上る。

ないが落差のある滝だ。

動の上滝」が見えてくる。水量は少  
ピードアップして歩く。すると「不  
る。しばらく下り坂が続く、少しス  
た。初春といえども、歩くと汗が出  
る。水分補給をしっかりと出発す  
馬の安全を願う馬頭観音が立つ。こ  
この木は羽黒坂を登りつめた休み場  
の目印となっている。すぐ側には、  
馬の安全を願う馬頭観音が立つ。こ  
ここで私たちが一休みすることにし  
た。初春といえども、歩くと汗が出  
る。水分補給をしっかりと出発す  
る。しばらく下り坂が続く、少しス  
ピードアップして歩く。すると「不

送っているかのような。  
氷川橋を渡りきると急な坂が現れ  
る。羽黒坂と呼ばれるこの坂は街道  
を行き来する馬や馬車の難所だっ  
そうだ。息も切れ切れに登り切ると  
巨木が見える。「槐木」と呼ばれる  
この木は羽黒坂を登りつめた休み場  
の目印となっている。すぐ側には、  
馬の安全を願う馬頭観音が立つ。こ  
ここで私たちが一休みすることにし  
た。初春といえども、歩くと汗が出  
る。水分補給をしっかりと出発す  
る。しばらく下り坂が続く、少しス  
ピードアップして歩く。すると「不

2021年4月8日、朝9時に奥  
多摩駅に集合し、奥多摩湖を目指し  
出発する。初春の風が心地よい。駅  
からすぐの多摩川に架かる氷川橋を  
渡る。橋のたもとには、奥氷川神社  
がある。樹齢650年と考えられる  
3本杉が目印だ。空に向かって真っ  
直ぐに立つ姿は、まるで私たちを見  
送っているかのような。



### ● 廃線跡に思いを馳せる

1952年に小河内ダム建設のために整備された小河内線の廃線跡が残る。小河内ダムが完成した1957年に廃線となる。



### ● 馬と人が最高のパートナーだった時代

1. 難所にある牛頭観音。牛馬の安全を願うもの。
2. 石で作られた馬の水飲み場。かつて、ここで馬を休ませた。



### ● 滝に癒やされる

「不動の上滝」静かな登山道に滝の音が響いていた。水の流れを見ていると無心になれる。



### ● 偶然の出会いからわさび田の見学

1. 偶然の出会いからわさび田を見学させてもらう。
2. わさびの花が咲いていた。
3. 山から湧き出る水を使ってわさび栽培をしている。水は冷たく澄み切っている。



滝に別れを告げ、先を急ぐ。すると、集落の頭上に1952年に小河内ダム建設のために整備された小河内線の廃線跡の鉄橋が見える。錆と黒光りした鉄が、長年風雨にさらされてきたことを物語っている。鉄橋を眺めていると、突然地元の方に話しかけられた。お話によると、すぐ近くでわさび栽培をしている農家さんのことだ。早速、わさび田を見せて頂いた。冷たい湧き水を使ってわさび栽培をしているそうだ。しばし歓談し、奥多摩湖を目指して再出発。こんな偶然の出会いも楽しい。

道沿いには、「馬頭観音」や「牛頭観音」、「馬の水飲み場」など、かつては自動車の代わりに移動や輸送に使われていた馬や牛に関係するものが多く残されている。また神社も、道沿いに建っており、街道が使われていた当時の面影を偲ぶことができる。

それらを横目に先に進む。すると耳神様が見えてくる。耳神様は、耳痛を治すと信じられている神様であ



● 病気と祈り

1. 耳神様。耳垂れや耳痛の際に、穴の開いた小石を供えて祈ったという。
2. こちらは、虫歯地蔵。煎った大豆を供えて、回復を祈ったそうだ。



● 多摩川の清流

1. しだくら吊橋。かつては藤のツルで橋を吊っていた。
2. 吊り橋から見る多摩川。
3. 所々に春の息吹を感じる。



● 奥多摩湖ヘラストスパート

1. 奥多摩湖に近づくにつれ、坂がきつく、足元も悪くなる。
2. 木々の間から奥多摩湖が見える。あと一息。



● 神社と信仰

1. 白髭神社。
2. 白髭神社社殿の横にそびえる白髭の大岩。
3. 羽黒坂近くの羽黒三田神社。

る。医療が発達していない時代に、その回復を願って、穴がある小さい石を見つけて供え、耳痛が治るよう一心に祈ったそう。では、歯が痛くなった時にはどうしたのだろう。そんな時は虫歯地蔵もある。煎った大豆をお地藏様に供えて、歯痛の回復を祈ったというお地藏様だ。耳や歯が痛いあなた。是非、耳神様、虫歯地蔵に行ってみよう。

歩いて約3時間、だんだん山深くなっていく、谷も深くなってくる。その谷に「しだくら吊橋」が架かっている。「3人以上は歩かないで」と看板に書かれているのを確認して、恐る恐る渡ってみる。揺れが少し怖い、勇気を出して橋の下を見ると多摩川が美しい渓谷をつくり出している。吊橋を過ぎ、「西久保の切り返し」を登る。ここから先は、かなり急な坂と、足元が悪い登山道が続くが、奥多摩湖まではあと少しだ。その難所を越え、ついに奥多摩湖に到着。奥多摩駅を出発し、4時間



### ● 小河内ダムから流れ出す多摩川

地図上の多摩川は小河内ダムの水の出口からスタートする。ここから徐々に川幅が大きくなる。



### ● 下山はバスで

4時間の登山を終え、奥多摩湖のほとりのベンチで昼食。帰りは奥多摩駅までバスを利用。わずか20分で到着。帰りの鉄道内では、疲れのためみんな爆睡でした。

ダムを見学した後は、奥多摩湖のほとりのベンチに座って、お昼ご飯を食べた。一休みしながら水筒のお茶を飲む。このお茶は自宅の水道水を使って作ったものだ。ということは奥多摩湖の水を使ったお茶かもしれない。そう思うといつも使っている水が特別なものに思えてきた。



### ● 奥多摩湖と小河内ダム

1. 難所を越えると人家が見えてくる。奥多摩湖まであと少し。
2. ダム堤体の谷側。カメラのフレームに収まりきれないほどに大きい。
3. 余分な水を放流するための余水吐。



### ● 登山道から見た奥多摩湖と小河内ダム

写真左側に見えるのが小河内ダムの堤体。小河内ダムがせき止めた水が奥多摩湖をつくっている。

が経過していた。

奥多摩湖は正式には「小河内貯水池」という。小河内ダムによって造られた人工の湖だ。小河内ダムは1938年に着工し、19年後の1957年に竣工した。その当時、奥多摩湖は世界で最大規模の人造湖であった。現在でも日本で最大規模の人造湖だ。また、奥多摩湖は「東京の水がめ」と言われ、首都圏の人々の貴重な水源となっている。その総貯水量は1億8千万トン。東京都の人々が利用する水の約2割を供給している。分厚いダムの堤体の上からはるか下を眺めると、堤体から流れ出す多摩川が見える。インターネットでは感じ取れない物凄い迫力だ。





多摩川に架かる府中四谷橋からの眺め。(28頁掲載)

 part 3

# 多摩川の 自然と歴史

「多摩」の名前の

由来となっている多摩川。

その川の長さだけ

豊かな自然が育まれ、

過ぎ去った年月だけ

歴史が重ねられ、

多くの物語が生まれました。

その現場を訪ねます。

# 35+103km 先の景色



## 多摩川最初の一滴が落ちる場所

河口から35kmの日常

行き止まりまで103km

帝京大学八王子キャンパスは、多摩川とその支流である大栗川に挟まれた丘の上に建つ。そのため学生と教職員の多くは毎日、川を渡って大学に通う。なかでも利用者が多い橋が府中市と多摩市を結ぶ京王線多摩川橋梁だ。映画「耳をすませば」の冒頭にも使われ、天気がよければ車窓から富士山を望むことができる日常のなかの名勝だ。

この橋梁は、多摩川が海に注ぐ羽田空港脇の河口からおよそ35km上流に位置する。私たちの生活の場である「多摩」は、その名の通りこの川に形作られ、育まれてきた。この流れのさらに上流にはどのような景色が広がっているのか。梅雨の晴れ間に、多摩川の最初の一滴を訪ねた。

本号の他のページで取り上げた川や湧き水はそれぞれが多摩川の水源だ。さらに上流部の流域は下の図の範囲に示すように、東京都を越えて山梨県へと広がる。では、多摩川のはじまりはどこにあるのか。

江戸時代の終わり、弘化二年（1845）に作られた『調布玉川惣画図』（多摩市教育委員会所蔵）には、三頭山の北西に「玉川水源」とあり、大菩薩嶺の近くまでの流れが描かれている。

現在において広く知られている多摩川の最初の一滴が落ちる場所は、奥多摩湖から山梨県の丹波川を経て一ノ瀬川から水干沢と遡った先、笠取山山頂直下に位置する「水干」だ。京王線多摩川橋梁から



登山道から水干沢を見下ろす。この先の行き止まりに「水干」がある。「水干」とは沢の行き止まりという意味だ。



雨水に濡れた水干の岩場。この水が土の中にしみ込み、湧き水となって流れ出す。



多摩川の最初の一滴が落ちる「水干」。「多摩川の源頭 東京湾まで138km」の碑が建つ。

長野県



黄緑色の範囲が多摩川の流域だ。東京都を越えて山梨県まで広がっている。小さな川から、湧き水まで、多くの水が合わさって多摩川となる。



笠取山と雁峠の間にある「小さな分水嶺」。「分水嶺」は雨が異なる水系に流れる境界のこと。ここに降った雨は、ほんの少しの落ちる位置の違いで多摩川だけでなく、荒川・富士川へ流れて行く。

10.3 km。公共交通を使うとJR中央本線塩山駅えんざんからバスに乗り、新地平バス停で下車。そこから谷渡川に沿って、片道8.5 kmの登山道の終点にある。「東京湾まで138 km」と記された東京都水道局の碑が目印だ。水干とは、沢の行き止まりの意味であり、登山道から水干を見下ろすと、自身が谷の終着点に立っていることを実感する。湿った岩場に滴り落ちた一滴の水は、いったん土の

中にしみ込み、60 mほど下で湧き水として顔を出す。

### 分水嶺と県境

水干のある笠取山は、東京都最高峰の雲取山と、山梨県・埼玉県・長野県の境に跨る甲武信ヶ岳こぶしがたけを結び、奥秩父主稜の間に位置する。県境とも重なるこの稜線は、雨水のゆくえを分ける分水界でもある。笠取山と雁峠がんちうげの間にある「小さな分水嶺」は



奥多摩湖に沿って青梅街道を山梨県方面に進んだ先にある、奥多摩町と丹波山村の都県境。多摩の古い呼び名の1つと考えられる「たば」と読む地名が現在でも残っている。



笠取山の山頂の直前に急坂がある。山頂に降った雨は、この坂に沿って土にしみ込み、川へ流れる。



長野県・山梨県・埼玉県の県境にまたがる甲武信ヶ岳。荒川・富士川・信濃川の分水嶺だ。

多摩川・荒川・富士川の分水嶺となる。甲武信ヶ岳も荒川・富士川・信濃川とそれぞれ三つの河川の分水嶺となる。この一帯に降った雨は、多くの地域を潤して、東京湾・駿河湾・日本海へと注ぐ。

### 「たま」の源流「たば」

『日本歴史地名大系』には、平安時代中期に作られた辞書の『倭名類聚抄』国郡部の項目の中に、「武蔵国「多磨」郡に「太婆」の訓が付せられており、古くは多摩川もたば川と称されたものか」とする指摘がある。そして現在でも「たば」の地名が残る場所がある。奥多摩湖に流れ込む丹波川たばがわと、その流域の山梨県北都留郡丹波山村たばやまだ。丹波とあると、京都府中部と兵庫県東部の旧国名から「たんば」と読みたくなるが、それぞれ「たば」と読む。もしかすると、この地域には多摩の名前の源流が残されているのかもしれない。

甲田篤郎（帝京大学総合博物館）≡文・写真  
松本健吾（史学科3年）≡マップ加工作成

# 私の知らない魅力を探しに

愛媛県から上京してきた私は、多

摩の水と言われて多くのことを連想することはできないが、多摩川は真っ先に思いついた。しかし、近くに住んでいるにもかかわらず、多摩川についてあまり知らないことに気がついた。そこで実際に多摩川を散歩し、自分の知らない多摩川の魅力を発見したいと思った。

## 心落ち着く多摩川

曇り、ときどき雨。京王線 聖蹟桜ヶ丘駅を降りて多摩川の河川敷の遊歩道沿いを歩く。雨上がりの土の匂いが漂う。歩いていると、ランニングやサイクリングをしている人とすれ違う。耳をすますと、川の流れる音と一緒に、子供連れの人の声や、多摩川に架かる鉄橋を渡っている電車の音が聞こえてきた。河川敷にはテニスコートやサッカー場、ベンチが設置されている。晴天の日には、きっと今日よりも多くの人を訪れ、賑わうのだろう。

曇り、ときどき雨の日の多摩川。その流れを眺めながら天気や季節ごとに化する姿を想像する。



小野神社社殿。朱色の外壁が印象的であった。

雨の日、晴れの日、春・夏・秋・冬によって変化するであろう、さまざまな多摩川の姿を想像しながら次の目的地を目指した。

## 住宅街にたたずむ小野神社

多摩川河川敷から住宅街に入ると、およそ10分程度で、「武蔵国一之宮」と呼ばれる小野神社が見えてくる。この神社は、鎌倉幕府がつくった『吾妻鏡』という記録書に、その頃の武蔵国（現在の東京都と埼玉県）の中で最も社格の高い神社の「一之宮」であると記されている。この由緒正しい神社の大きな鳥居をくぐる。雨がしとしと降る境内は静かで、おごそかな雰囲気であっ



小野神社に参拝した証として御朱印を頂いた。

た。朱色の拝殿にお参りし、その証の御朱印を頂いた。その後、小野神社を出発して聖蹟桜ヶ丘駅に戻る。およそ30分程度のゆったりとした散歩であった。

\* \* \*

今回の散歩を通して、多摩川の魅力だけでなく、自分自身が知らなかった神社に巡り合い、多摩地域の新たな魅力を発見することができた。それと同時に多摩地域にはもっと多くの魅力が隠れていると感じた。コロナ禍の今だからこそ、自然に寄り添い、多摩地域の魅力を再発見してみたいと思う。

野口愛由(経済学科2年) || 文・写真



耳をすませばのラストシーン。朝日に染まる聖蹟桜ヶ丘の街と、多摩川が眼下に広がる。  
(画像：スタジオジブリホームページより)

# 多摩川×散歩 耳をすませばの 聖地をめぐる

映画『耳をすませば』(柘あおい原作)は、宮崎駿が脚本を書き近藤喜文が監督を務めたスタジオジブリの作品だ。読書好きな女子中学生の月下雫は、本の貸し出しカードに記名されている天沢聖司の存在が気になっていた。ある日、一匹の猫ムーンに導かれ不思議なアンティークショップ「地球屋」で二人は出会う。互いに進む道は違うけど、思い合う心は同じで…。

この映画の舞台は多摩川からほど近い京王線聖蹟桜ヶ丘駅の周辺だ。今回は多摩川から少し歩いた場所にある、作品の「聖地」を巡った。

## 坂と自転車と息切れと

聖蹟桜ヶ丘駅で下車すると、そこには映画の舞台が広がっている。今回は、映画の中で「地球屋」が立地するロータリーのモデルとなった場所を目指して歩いた。駅から5分ほど歩くと、息切れするほどの急な坂道が現れる。「いろは坂」と呼ばれるこの坂道は、映画のラストシーン直前に「雫」と「聖司」が自転車に乗り、それぞれの思いをぶつけ合う名シーンで使われた坂である。嗚呼、聖司に「乗れ！」と言われたい。

## 甘い恋とお菓子の味

いろは坂を登り切ると、目的地のロータリーが見えてくる。見渡すと、映画の中で「地球屋」があった場所に、素敵なお店があった。

まずは、「ノア洋菓子店」の扉を開ける。お店のカウンターには映画の中で登場する、「パロンの人形」が飾られていた。販売しているサブレは、厚みがありサクッと砕けたと思えば、口に広がる甘さと共にほろほろとした食感が楽しめる。ケーキ



右/息切れするほど急な「いろは坂」。  
中上/映画では聖司が息切れしながら自転車を漕ぐ。  
中下/いろは坂を登り切ったら見えるロータリー。  
左上/雫と聖司の出会いの場となる地球屋。



の中にはすっきりとしたくちどけのクリームがふんわりした生地に挟まれ、口に入れると、優しいハーモニーを奏でる。上にはチョコレートがのっているのもうれしい。

次に日本料理のお店、「dining 和桜」に入ってみる。注文したのは、期間限定の梅スカッシュだ。しゅわっとした炭酸が喉を潤し、梅は果肉ごと入っているためもちもちとした食感が味わえる。飲みながら窓の外を眺めると「耳をすませば」の世界に入り込んだようだ。もしかすると猫のムーンが素敵な夏を運んでくるかもしれないと思った。

海老沼美琴(社会学科2年) || 文・写真



「ノア洋菓子店」のカウンターにあるパロン人形と名物サブレ。



「dining 和桜」でホットと一息。梅スカッシュをいただいた。



羽村取水堰しゅすいぜき

山梨県から上京して数ヶ月、祖母との会話の中に「羽村取水堰」という聞き慣れない場所の名前が出てきた。調べてみたところ、世界でも珍しい堰だという。そんな堰に興味を持ち、羽村市へ行くことにした。

## 江戸時代の大事業

羽村取水堰は、羽村市から新宿までの43kmからなる玉川上水の一部



羽村駅から徒歩10分の場所にある「羽村取水堰」。視界が開け壮大な景色が広がっている。

であり、多摩川の水を玉川上水に流すために造られた。玉川上水は1653年に造られた上水路だ。その頃、江戸の人口が増えたため、生活のための水が不足していた。そこで幕府は多摩川の水を江戸に引く計画を立てると、着工からわずか8

カ月で玉川上水を完成させた。工事の規模の大きさ、完成までのスピードの早さ、どちらをとっても江戸時代の代表的な大事業だ。そして、その事業の要になるのが私が訪れた羽村取水堰だ。

世界でも珍しい投渡堰

## 世界でも珍しい投渡堰

羽村取水堰は川をせき止める投渡堰、固定堰、魚類の往来する魚道、せき止めた水を取り入れる第一水門からなる。堰を見てまず驚いたのは、丸太を使っていることだ。この型は投渡堰と呼ばれる。世界でも非常に珍しく、一定の水位を超えると水を堰き止めている丸太を下流に流す投渡木払いを行う。

水位が下がるとまた丸太を使い堰を人の手で再度組み立て直す。江戸時代にこの方法が考えられ、その技術が現代まで伝わっている。長きに渡り伝え続けてきた人々の努力に感銘を覚えた。

## 玉川兄弟の活躍

堰の近くには銅像が建てられている。「玉川兄弟の像」と書かれたその像の2人は庄右衛門、清右衛門という名の農民であり、玉川上水開削の指導にあたった功労者である。こ



「投渡堰」の風景。写真にある丸太が河川の増水の時には流される。江戸時代から伝わっている技術である。

の功績により玉川の姓を名乗ることを許されたという。

## 羽村の花と自然

羽村取水堰周辺は桜が美しいことも知られている。春に行われる「はむら花と水のまつり」では200本の桜と約35万本のチューリップを堪能することができる。また、羽村取水堰近くの橋からは堰全体を見ることがができる。水の流れとともに凍といた姿を見せる堰に圧倒されることだろう。想像以上に壮大な景色は私にとって衝撃的で、なかなかその場から立ち去ることが出来なかった。

荒井涼花(史学科1年) 文・写真



玉川上水建設の指導にあたった玉川兄弟の像。迫力があり凛々しい表情をしている。

# 「人間失格」

## 〜太宰治の最期を訪ねる〜

1948年6月13日、作家・太宰治は、妻と子どもを残し、愛人の山崎富栄と共に、東京都三鷹市を流れる玉川上水にて入水自殺をした。その6日後の6月19日に2人の遺体は発見された。この日は太宰の39歳の誕生日でもあった。発見された2人の身体は赤いひもで結ばれていたという。今回、私は、そんな太宰の最期を知るため、彼の愛した土地、三鷹市を流れる玉川上水を訪れた。



青森県特産の玉鹿石。太宰治が入水自殺をした場所の目印となっている。



現在の玉川上水。かつては「人喰い川」として恐れられていた。

### 風の散歩道

JR三鷹駅を降り、風の散歩道と呼ばれる小道に入る。入り口には、あじさいが咲き、訪れる人々を迎えていた。小道沿いには玉川上水が、うっそうと茂った緑の中をひっそりと流れていた。かつては、人をもみ込むほどの勢いがあったそう。その流れを想像しつつ歩みを進める。

女性の心理を描くことの多い太宰



風の散歩道の入口に咲くあじさい。まるで、ここを訪れる人々を迎えるように咲いていた。

であるが、彼は、富栄をこう口説いたという。

「死ぬ気で恋愛してみないか」

いかにも彼らしい言葉であるが、この道を歩いていると、そういった彼の生きた痕跡が、自分の中でいきいきとしてくる。

### 玉鹿石

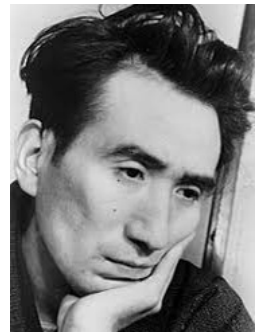
ついに、太宰が亡くなった場所を示す「玉鹿石」に到着する。玉鹿石とは、彼の出身地である青森県特産の天然石である。彼への敬意をこめ、この場所に設置されている。期待とは裏腹に、玉鹿石の周りにはそれらしいものは何もなく、注意して歩かないと、見逃してしまいそうな

ほどであった。しかし、まさにこの場所であつた太宰治が亡くなったということを考えると、不思議な胸の高まりを感じずにはいられなかった。

### さいごに

私は、今回の取材を通じて、太宰治に関しての多くの知識を得た。そして、彼の生きた土地である三鷹を実際に歩くことで、それらの知識が、自分の中でより鮮明に、よりカラフルになってゆくのを感ずることができた。三鷹市は、多くの文化人がかつて住んでいたことで有名であるが、それは、三鷹市を含む多摩地域の、優れた魅力の一つなのだ。

三好龍之介（経済学科2年）Ⅱ文・写真



有名な太宰の写真  
撮影：林忠彦



お鷹の道に沿って流れる湧き水。(33頁掲載)

part 4

# 武蔵野

# 湧き水めぐり

多摩川が台地を削り生み出した

「ハケ」と呼ばれる崖。

水により丘陵地が削られ生まれた

「谷戸」と呼ばれる谷。

これらの近くには、

必ず湧き水があり

時代をこえて連綿と

人々に親しみ続けられています。



# お鷹の道・真姿の池湧水群

ますがた

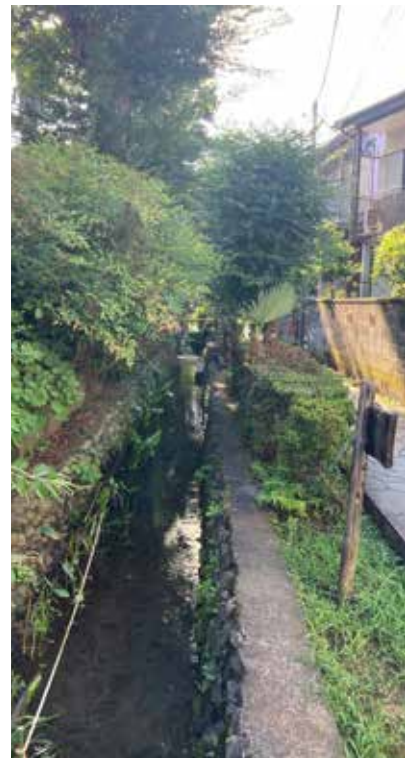


神秘的な雰囲気が漂う真姿の池。

国分寺市の住宅街に静かに佇むお鷹の道・真姿の池湧水群。清涼な風に吹かれ、とても神秘的な雰囲気が漂っている。お鷹の道・真姿の池湧水群は、環境省が選定した名水百選に選ばれている湧き水の聖地である。私はその魅力に迫りたいと思い、そこを訪れることにした。

## 人々に親しまれるお鷹の道

国分寺崖線<sup>がいでん</sup>下の湧き水は、野川へ流れ込む清流となる。お鷹の道は、その清流沿いの小道のことだ。寛延元年（1784）より周辺の村々が尾張徳川家の鷹狩りの場として利用されていた場所だったことから「お鷹の道」という名前が付けられたと言われている。現在では、地元の方々に通勤や通学路として利用されており、子ども達の遊びの場となつて



清流沿いにあるお鷹の道。散歩や、通勤・通学の方々に使われている。

いる。人々が行き交うお鷹の道の様子を見て、地域の方々にとって身近な存在であることを実感した。また、遊歩道沿いを流れる清流のささやかな音と住宅街の静けさもあり、とても心休まる場所でもあった。

## 神秘的な空間〜真姿の池〜

真姿の池は、国分寺崖線から流れ出る湧き水がため込まれた池だ。喜祥元年（848）に玉造小町という女性が自身の病気を治すため、武蔵国分寺の薬師如来に願掛けをしたところ、この池の水で身を清めよとお告げを受けた。その通りにすると、病気が治り元の姿に戻ったというこ

とから「真姿の池」と名付けられたと言われている。

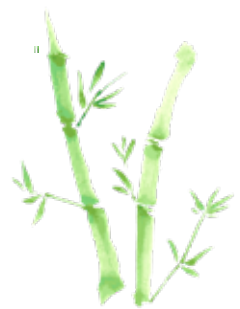
そこは雑木林の揺れる音と湧き水の流れ出る音だけが聞こえる場所だった。それはまるで自然が人間のように会話をしているようにも聞こえる気持ちになるとも神秘的な空間であった。私はその空間で自然の生命力を強く感じる事ができた。

\* \* \*

お鷹の道・真姿の池湧水群は、地域の方々に親しまれる場であると同時に、神秘的な空間に身を置くことができる湧き水の聖地であった。私は、この二つの魅力の虜になった。祝ちとせ(人間文化学科1年) 文・写真

# 竹林公園

## 竹と湧き水



西武池袋線東久留米駅から南に向  
かって10分ほど歩いた所にある竹林  
公園を訪れた。竹林公園は取材先を  
探していた時に初めて知った場所だ。

### ◎東久留米と自然

多摩地区は都心に比べ自然が多いが、  
竹が生えている公園はあまり見たこ  
とがない。そして私の出身地の北海  
道には竹林が少なく新鮮に感じ、ぜ  
ひこの機会に行ってみたいと考え、  
この公園に行くことに決めた。

東久留米市は、縄文時代の遺跡が  
100カ所以上も見つかっており、  
古くから人々が住み続けている歴史  
のある場所だ。今回訪れた竹林公園  
は竹林を保存するために1965年  
に造られた公園だ。公園内を一周で  
きるような遊歩道が整備されており、  
湧き水と竹林を歩きながら楽しむこ

とができる。6058平方メートル  
の敷地に数えきれないほどの竹が生  
い茂っており、その風景は「新東京  
百景」に選定されている。住宅街の  
中を通り、公園の入り口から竹林の  
中を進むと、湧き水と、それからで  
きた小川が見えてくる。この湧き水  
は「東京の名湧水57選」にも選ばれて  
いる東久留米市の「落合川と南沢湧  
水群」の1つだ。

### ◎竹で囲まれた世界

私が訪れたのは6月初旬の午後だ。  
その日は気温が30度近くもあるとて

も暑い快晴の日だった。しかし、竹  
林の中に入っていくと、太陽の光は  
竹の間から漏れる日差ししかない。  
そのため、竹林の中は涼しく別世界  
に似たような気分になった。風が  
吹いたときに頭上から聞こえる笹の  
葉のゆるる音と、時折響く鳥の鳴き  
声が、周りを住宅で囲まれていると  
は思えない雰囲気を作り出していた。  
遊歩道にはテーブルと椅子があり、  
そこに座り、ゆっくりと竹を眺めた。  
東京にいるはずなのに人の声は全く  
聞こえず、笹の葉がゆるる音が聞こ  
えるだけだ。さらに奥に進んで行く  
と、湧き水の源泉が見えてくる。近  
くへ行ってみると、透き通った湧き  
水にアメンボが泳ぎ、そこから続く  
小川は穏やかに流れている。その水  
は、限りなく透明に近い色をしてい  
たため、水底がはっきりと見えるほ  
ど透き通っていた。私は時間が過ぎ  
るのを忘れて、その水に見入ってし  
まった。



アメンボが泳いでいる湧き水の池。  
静かに流れている。

小松結衣（心理学科3年） || 文・写真



公園内に生える竹。まっすぐ天に向かっ  
て伸びている。

# 心安らぐ湧き水

ママ下湧水公園



上/こんこんと湧き出る「ママ下湧水」。かつては、ワサビの栽培にこの湧き水を利用していただ。下/ママ下湧水が湧き出る場所を上から見る。崖の上に降った雨が、土にしみ込み崖の下に湧き水として湧き出ている。



サラサラと流れるママ下湧水。その流れは眺めているだけで心を落ち着かせてくれる。

セミの鳴き声が聴こえ始め、日差しがじりじりと肌を焼き付ける季節。学園都市のイメージが強い国立市で、人混みを避け、ひっそりと「涼」を感じられる湧き水がある。

「ママ」ってなに?

遠い昔、多摩川の流れは武蔵野の台地を削り、幾筋もの河岸段丘を形成した。「青柳崖線<sup>がいでせん</sup>」はそのひとつであり、こうした崖線は、その崖下に多くの湧き水を生む。それが今回訪れた「ママ下湧水」である。

ママ下湧水は国立市の南西部、JR南武線の矢川駅から約1km、徒歩約15分の場所に位置し、多摩川にほど近い場所にある。「ママ」とは「崖」を意味する古語である。現在、ママ下湧水と知られている場所は、その昔「上(かみ)のママ下」と呼ばれており、この湧き水を利用してワサビの栽培が行われていたそう。

ママ下湧水の周辺は「ママ下湧水公園」として親水公園のように整備

されており、春から夏にかけて近所の子どもたちの水遊び場となっている。また、都市計画により自然環境が保全されており、緑濃い景観を保っている。昔ながらの崖線の表情を残した風景が魅力で、ウォーキングを楽しむ人たちも多く訪れる場所である。

水を感じる

訪れた日は暑く、強い日差しが照り付けていた。こんこんと湧き出る水は、太陽に照らされ美しくキラキラと輝き、透き通っている。湧き水に手を入れてみると、水はひんやり冷たく、蒸し暑さを忘れさせてくれた。サラサラと流れる小川は清らかな清水川となり崖下を流れる。その流れは、眺めているだけで夏の暑さを和らげ、心を落ち着かせてくれる。国立市で、ひっそりと湧き出るママ下湧水は、都会で暮らす人々に癒しを与えてくれるだろう。

染谷美紅(経営学科3年) 文・写真

# からきだの道

## 緑豊かな多摩の自然

多摩市唐木田の北側にある「からきだの道」。唐木田駅から徒歩10分。または、多摩センター駅から徒歩15分と両駅から徒歩圏内に位置する。多摩ニュータウンの開発に伴い唐木田地区の新しいまちづくりの一環として自然の丘陵地形を活かして整備された緑地だ。今日、唐木田エリアは整った住宅街が広がるが、かつては雑木林が広がる丘陵地だった。今回はからきだの道を散策して感じた豊かな多摩の自然を紹介する。



からきだの道の入り口。新緑がまぶしい。



のんびり草を食べているヤギ。都会の生活で見ることがないのでびっくりした。

### 多摩の自然から見る世界

からきだの道は、全長2キロのコースである。入り口の石畳の階段を登り終えた先に、かつてはいたる所で見られたであろう多摩丘陵の自然が広がっている。

歩いていると丘陵地に3匹のヤギがいた。ヤギは普段の生活で滅多に見ることがないのでとても驚いた。日常にはない体験をし、まるで森の中で冒険しているような気分になった。

車の音や人の声が全く聞こえない。ただ自分が歩いている足音だけが聞こえる。地面には、たくさんの落ち葉が落ちていて路面が安定していない場所がある。慎重に歩かないと躓きそうになってしまったりする恐怖もあった。でもほんの少しの日差しがあるおかげで不安や恐怖が和らげられ晴れやかな気持ちになる。さらに進むと、多摩センター方面が一望できる「見晴らしの広場」に行き着く。その一角に多摩ニュータウンの街並みを見渡すことができる展望台があった。そこからの眺めはニュータウン特有の自然と人工物が融合した世界を感じ取ることができる風景が広がっている。

### かつての水の営み

展望台の階段を下ると、「寺ノ入の湧水」がある。かつてこの周辺では湧き水がいたる所で見られていたそうだ。しかし今ではそれらも少なくなっただけ、貴重な場だ。湧き水

の周りにはコナラやシラカシなどの樹木や草が生い茂っている。ビルや住宅が立ち並ぶ多摩ニュータウンだが、かつては、このような景観が広がっていたのかもしれないと思いはせた。

\*\*\*

緑豊かで新鮮な草木の匂いと静寂が支配し、心が安らぎリラックスできる雰囲気からきだの道。多摩の豊かな自然を感じる事ができるこの場所は、これからの私の癒しスポットになりそうだ。

安井菜緒（社会学科3年） 文・写真



寺ノ入の湧水。かつてはこのような湧き水が沢山あったそうだ。



ママ下湧水（国立市）の澄んだ湧き水は、川底をくっきり映す。（35頁掲載）

part 5

# 水に親しむ

水にもっと親しむために、  
水と本、水とスポーツ、  
水と公園、水と生き物など、  
編集部のメンバーがそれぞれ  
興味のあることについて  
取材しました。

# 雨の日に読みたく

## なる話

雨の日のしっとりとした空気、どんよりと感じたり、わくわくしたり、いっしょとはなんだか違ったように感じられる。そんな雨の日に読みたくなるお話。

### 「100年前に降った雨：貫井物語」

著者／野口由紀子

出版社／ふゆーじょんぷろだくと 2001年



武蔵野台地の湧き水は、今から100年前に降った雨だったのかもしれない。著者のそんな言葉に導かれ本を開くと、過去から現在まで続く水と人間の豊かな関わりに驚く。そして掲載された写真からは水が持つ豊かな表情にはっとさせられる。

### 「幻談・観画談」

著者／幸田露伴

出版社／岩波書店 1990年

登場人物である晩成先生は、作品のあるシーンで、雨に心を乱される。雨の日に感じる少しナイーブな気持ちに寄り添う感覚で、このお話を読みながら、静かでゆったりとした時間を過ごしてみるのはどうだろうか。



### 「ちいさな

### きいろいかさ」

イラスト／にしまさかやこ

シナリオ／もりひさし

出版社／金の星社 2004年

なっちゃんがお母さんに買ってもらった、きいろいかさを持って初めてお散歩に出かけるお話。

なっちゃんのかさに色々な動物が集まってくると、それに合わせて傘は形を変えていく。不思議でわくわくするお話に、きっと雨の日をほっこりした気持ちで過ごせるだろう。

\* \* \*

雨が大地に降り注ぐことで、川や湧き水が生まれる。

今回のミコタマでは、さまざまな多摩の「水」に関するスポットについて掲載している。雨の日に家で読書を楽しむのももちろん良いが、晴れの日に外へ出て本誌で取り上げたスポットへ足を運び、多摩の魅力に触れながら本を読むのも、またひと味違った感覚を味わえるかもしれない。なんだか疲れたとき、思いもかけず時間ができたとき、本を手に取り、ゆっくりとした時間を過ごしてみたいかがだろうか。

中田美涼（心理学科3年） 〓 文





帝京大学駅伝部を指導する、中野孝行監督。  
(写真提供：帝京大学駅伝部)

暑い夏を  
のり切ろう!

# ジョギング と水分補給

- 帝京大学駅伝部 中野監督に聞く -

最近、多摩川や大栗川沿いでジョギングやウォーキングをする人が増えているように感じる。そこで、ジョギング中の水分補給の大切さについて、帝京大学駅伝部監督の中野孝行先生にインタビューしてみた。

## 水分補給はパフォーマンスを上げる

私が大学生の頃は、熱中症とか熱射病なんて聞いたことはなかったんだよね。もちろん今考えたらあれは熱中症だったのかなって思うものもあつたよ。水を飲んだら「へばってんじゃない」って怒られた。

でも今は水分補給をしっかりするのが普通。理由は単純で、レース中のパフォーマンスが上がったり、体にダメージが少ないって、みんな言うようになった。

一般の人でもこまめに水分をとることは大事だよ。ジョギングのダメージを少なくできるし、なによりご飯が美味しく食べられるよ。

## 冬なのになぜ脱水?

箱根駅伝では、脱水症状での棄権って結構あるけれど、お正月の寒い気温の中で脱水するのかって思うよね。実は原因は、当日だけじゃないんだよ。今まで棄権した人の話

をよくよく聞いてみると、1週間前から体調が悪かったみたいなんだよね。

しかもレース前は緊張して、ご飯が喉を通らない、水も飲めないで、体の中の水分が徐々に減っていつちゃう。箱根駅伝の当日だけで、脱水症状になったって話は聞かないかな。

## スポーツドリンク今昔

それまで、スポーツドリンクはスポーツ店にしか売ってなくて、しかも輸入品で高い。ゲータレードは結構有名だったよ。話は少しそれるけれど、アメフトの大会でゲータレードをタンクに貯めて優勝した時、かけ合うっていうのが、今のビールかけ、シャンパンファイトの走りだったんだよね。

ポカリスエットってあるでしょ。あれは私が大学生の時(1980年頃)に販売がはじまったんだよ。カーレーサーのために作られたのが最初なんだって。レース用の車は車体を

軽くするためにエアコンを付けないんだよ。炎天下のレースでは汗が滝のように出るらしいんだよね。普通に水を飲んでいると追いつかないから、点滴をそのまま飲んだ。それでポカリスエットは飲む点滴をコンセプトに開発されたものなんだよ。凄いやね。

さらに凄いのが、スーパーマーケットに置いて、しかも普通のジュースと同じ値段にしたところなんだよ。だからみんな飲んだ。スポーツ以外にも、疲れたり子供が熱を出したときに「ポカリ飲みな」って言うよね。

最近「OS-1」などの経口補水液もあるけれど、普段から飲むと塩分過多になるみたい。「ちよっどいいしょっぱさ」を感じるくらいの時に飲むといいね。

※話はまだまだ続きますが、今回はこの辺でおしまいです。中野監督ありがとうございました!

小川果梨(スポーツ医療学科3年) 文

# 美しい自然 瓜生緑地

どこにある？ 瓜生緑地

瓜生緑地の魅力

小田急永山駅から徒歩約20分、永山駅前通りをまっすぐ進み、南多摩保健所前を曲がり、さらに永山さくら通りを進んでいくと、緑に囲まれた瓜生緑地に到着する。

実際に行ってみると、想像していたよりも静かで神秘的な雰囲気包まれていて、入るのに少し緊張した。



「瓜生緑地」と刻まれた石。少し色が褪せているのが、また良いと感じた。

入口には目印として「瓜生緑地」と刻まれた石が設置されている。その場所から下に続く道を進むと、牧草地のような綺麗な草が生い茂る場所にたどり着く。

そこから少し進むと池がある。この池は地下水をくみ上げて造られているそうだ。私は雨の日に取材に



亀と鯉がほどよい距離感でのんびりしている。とても微笑ましかった。

行ったのだが、雨が池に落ちるポチャ、ポチャという音が、雨空で沈んだ私の心を癒してくれた。

その池から反対に進むとトンネルがあり、そのトンネルを進むと先ほどの池よりもさらに大きい池が広がっている。池を覗き込んでみると亀がお互いの顔を突き合わせているのが見えた。にらめっこをしているように見え、私は思わず、スマートフォンを押し出した。

池にしているのは亀だけではない。色とりどりの鯉の群れにも遭遇した。私は、鯉は群れで泳いでいるイメー



瓜生緑地の奥に進まないと見つからない秘密の池。

ジがなかったため、鯉が仲良く群れで移動している姿をみて驚いたのと同じくらい、ほっこりとした気持ちになった。ちなみにこの池は釣りや入水することは禁止されているので要注意。

池の横には池全体を見渡せる休憩所が設置されている。丁度良い広さで池を堪能できるのがうれしいポイントだ。

瓜生緑地は南北に長いので、すべて散策しようとするとかなりの時間が必要だ。しかし、日陰が多いので、ウォーキングやジョギング、犬の散歩にはぴったりだろう。

\* \* \*

瓜生緑地は、都心にはない緑があふれていた。もし永山に来る機会があったら、ふらっと立ち寄ってみるのはどうだろうか？ きっと自然のパワーを貰えるに違いない。

山崎柚夏（史学科1年） || 文・写真



# 自然の中の鏡

## 多摩中央公園 きらめきの池

多摩の美しい池

雨と揺れる鏡

多摩市の多摩センター駅近くに位置する多摩中央公園。緑豊かな公園内には歴史ある建造物のほか、人工的に造られた、いくつかの池が点在している。「きらめきの池」はその池の一つである。

訪れた日は雨だったが公園では子どもたちや親子が遊んでいた。私はこの池が存在する「きらめきの池」広場に着いた瞬間、日常の中にありながらもちよつとした刺激を得られる場所になるような予感がした。日常と自然の儼かな雰囲気混ぜ合わせたような、そして清々しいよう

な不思議な感覚に感動を覚えた。

池の水面には、池のまわりに広がる緑と空が映し出されている。その反対側の池の水面には、現在改修工事中の多摩市立複合施設「バルテノン多摩」などが映し出されている。都会の風景と空のすべてを映し出してきらめく池は、まるで鏡のようだった。この鏡は空から落ちる雨粒の影響で揺れており、周りの風景をはっきり映しているわけではない。池に映る空の色は灰色ではあるが、そのかわり水面にたくさんの雨粒の波紋ができる池というのも、なかなか趣深いものがあると思う。雨のおかげで、晴れの日はまた違ったきらめきの池の顔を見ることができた。

\* \* \*

きらめきの池を前にすると不思議



空から落ちた雨粒が水面をぼかしながらも池はまわりの景色を美しく映し出していた。

議と落ち着いた。そして、その池を見ているあいだ、せわしない日々を忘れて過ごすことができた。皆様も一度訪れてみてはいかがでしょうか。この空気や景色は身体だけでなく、心までもまた癒してくれるかもしれない。

下坂 愛梨紗（心理学科1年）文・写真

# 水の中の小さな世界



3年前に内モンゴル自治区から留学のため日本に来た私は、多摩市に住んでいる。多摩市の中でも私が好きな場所は川だ。多摩川や大栗川、乞田川があるが、どの川も美しく、清らかな水面が夕日の光で金色に染まる時、とても感動する。しかし、私が今、一番気になっているのは大学に通学する際に通る「乞田」交差点の脇にある、小さな川だ。どうやら「湧き水」らしい。水面を見ると、清らかとはいえない緑色の何かの水の上を漂っている。2021年5月25日、気になった私は水の一部を採取してペットボトルに入れて持ち帰り、帝京大学総合博物館にある光学顕微鏡で観察してみることにした。



「乞田」交差点（多摩市）の脇にある湧き水。顕微鏡で観察するとどんなものが見えるだろうか。

## 緑色の正体は・・・

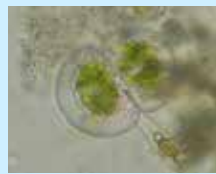
緑色の水を顕微鏡で観察するためスライドでスライドグラスに水を1滴落とす。そして、それを顕微鏡で観察する。するとそこには肉眼では見ることのできない小さな生き物たちの世界が広がっている。素早く動き回る透明な球体。色鮮やかな緑色の糸状のもの。透明なミミズのような生き物。どうやらこれらが水に漂っている緑色の水の正体のようなのだ。それではこの生き物たちは何なのか。帝京大学メディアライブラリーセンターで借りた微生物図鑑（『淡水微生物図鑑』月井雄二著 誠文堂新光社 2010年）の写真と照らし合わせてみた。

## 微生物のジャングル

肉眼では緑色の藻のように見えていたのは「アオミドロ」だ。細胞の中に見える緑色の粒は光合成をするための葉緑体だ。鮮やかな緑色をし



右/アオミドロ(右)の「ジャングル」を縦横無尽に動き回るソウリムシ(左)。  
中央上/「鼓」のようなかたちのツツミモ  
中央下/ミカツキモ。その名の通り三日月だ。  
左/細胞の周りにガラス質の殻を持つケイソウ。いろいろな形がある。



たアオミドロがジャングルに生えている木々のように見えてくる。その間を縫うように、素早く動く生き物がいた。「ゾウリムシ」だ。体の周りにある「繊毛」と呼ばれる毛のようなものをも動かし続け泳いでいる。何を考えて泳いでいるのかは分からないがその動きを追っていると時間を忘れて見入ってしまう。

## 身近な事から興味が広がる

17世紀のオランダに生きた、商人のレーヴェンフック。彼は、たまたましていた雨水を、自作した顕微鏡を使って覗き、その中に肉眼では見えない生き物たちがいる事を世界で初めて発見したと言われる。身近なものを観察することによって、今までにない大発見をしたのだ。きっと大興奮したに違いない。今回私も、顕微鏡を覗いた瞬間大いに興奮した。今までは気にとめなかった場所が特別な場所に変わった瞬間であった。

郭源(心理学科3年)Ⅱ文・写真  
堀越峰之(帝京大学総合博物館)Ⅱ文・写真

# 水の世界の掃除屋さん

知られざるタニシの生態  
これからのタニシ

水をキレイにする生物といえは？

そう誰かに聞かれたら、多くの人はタニシと答えるだろう。彼らは世界各地の淡水のあるところに生息し、日本では昔から田んぼや川で見られる。そんなタニシたちは「川や田んぼの水をキレイにしてくれる」と言うことで有名だが、果たして彼らはどのように水をキレイにしてくれるのだろうか。今回はその方法、そしてそんなタニシたちの悲しい現状を解説する。



帝京大学八王子キャンパス周辺において、タニシは近年見かけなくなった。写真は筆者の自宅近く（相模原市）で見つかったタニシ。

## タニシなの？ ジャンボタニシの正体

スクミリンゴガイはその通称をジャンボタニシとしながら、実はリンゴガイ科に属す貝でタニシの仲間ではない（タニシは盤足目タニシ科）。本来は食用として1980年ごろに日本に輸入された彼らであるが、需要がなく、次第に廃棄された。その後野生化し、今ではイネなどを食す有害な生き物と化してしまったのだ。

一方で、そんな彼らの習性を逆手に取ったのが、雑草のみを食べさせる「ジャンボタニシ農法」だ。除草剤を使わないという点でよい方法だが、田んぼの外に逃げ出してしまわぬように、管理が必須である。

実は食いしん坊？

タニシが水をキレイにする要因となるのが、彼らの食生活にある。水中に発生する藻やプランクトン、さらには他の生物の食べ残しや水底の沈殿物など、水が汚れる原因になるさまざまなものをタニシたちは食べる。このような食事の方法を「濾過摂食」といい、実は鳥のフラミンゴもこのような餌の取り方をしている。

こんにちは  
タニシウサギです



消えゆくタニシ

そんなタニシであるが、近年は田んぼ周辺の環境悪化や水質の汚染によって数を減らしている。実際に、私が子供の頃にタニシを見かけた河原（相模原市）に行ってみたが、その姿を発見するまでには苦労した。

この現象は帝京大学周辺においても同様で、近隣の田んぼで田植えをしていた方にお話を伺ったところ、昔はよく見られたが、近年は見かけなくなったそうだ。それを証明するように、環境省のレッドリストには現在、国内で多くみられるマルタニシが絶滅危惧Ⅱ種に、オオタニシは準絶滅危惧種に指定されている。今思うと、子供の頃にタニシをよく見た地元の川は、今よりもキレイだった。かつては身近な存在であったタニシであるが、その姿が見られなくなるのも時間の問題かもしれない。

僕を助けて



上原有響（外国語学科2年）|| 文・写真



# 編集部ニュース

2021年2月～8月までの  
ミコタマ編集部の活動  
をお伝えいたします。

## 文章の書き方を学ぶ研修会 (2021年5月20日)



ミコタマ編集部の研修会として、天日隆彦先生 (帝京大学法学部教授・元読売新聞論説員) を講師にお招きし、「文章の書き方」と題した御講演を頂きました。35年の新聞記者経験をもとに、取材の方法、文章のまとめ方などをお話し頂きました。「文章は感動させようと意識して書くものではない」「自分の感動を伝えたいという思いが大切」との言葉が力強く心に残りました。

## ミコタマ編集部の新メンバーを募集しました



2021年4月にミコタマ編集部の新しいメンバーを募集しました。17名の加入があり、総勢25名の編集部となりました。

## ロゴが新しくなりました



ロゴデザイン: 寺澤 頼来 (心理学科3年)

読者の皆様にさらにミコタマに親しんで頂く目的で、新たにミコタマのロゴを作りました。デザインはミコタマメンバーの寺澤頼来 (心理学科3年) が担当しました。丸い書体をベースに構成され、「ミ」の中心にある半円形のモチーフは、輝く太陽をイメージしています。また、「タ」の中央の水滴は、今回の特集をイメージしてデザインしました。この部分は特集によって、デザインを変える予定です。

## プレスリリースを出しました (2021年5月26日)



ミコタマの創刊につきまして、創刊号の編集メンバーの写真を添え、共同通信社のPRワイヤーを通じてマスコミ関係者向けにプレスリリースを出させて頂きました。

(<https://kyodonewswire.jp/release/202105245317>)

本リリースは様々なニュースサイトに掲載され、ご覧頂いた大阪のフリーメディア&シェア本屋『はっち』様にミコタマを設置頂くなど新たなつながりが生まれました。

特集まとめ

## 水がつなげる多摩の物語

子どもの頃、絵を描く際に

水を表現しようとするとき必ず水色を使っていました。

「水の色は水色」

そう考えていました。

今回取材を行い、行く先々で水を見ました。

驚いたことに水色をした水は一つもなかったのです。

あったのは「透明」な水だけでした。

そして透明な水は周りの様子に合わせて色を変えていました。

「水の色は水色」

実際の水を見もしないで決めつけていたのです。

晴れた空の青

雨雲の灰色

木々の緑

水の中にある、水草、石ころ、

生き物の色を合わせたモザイク色。

時には空の色を水面に映し出し、

時には周りの風景を鏡のように反射させ、

時には川の底の様子をそのまま見せてくれました。

どれ一つとして同じものがない水の色。

水にまつわる場の数だけ水の色があり

水の色の数だけ自然があり、

それに関わる人々の姿がありました。

## 編集後記

### 「新生活が始まって変わったこと」

**ク**ーラーをよく使うようになりました。私の実家は山梨で、扇風機で過ごせる気候の日が多いです。上京してきて、夏の暑さがこんなに体に痛いものだとは初めて知りました。東京の夏を体験してクーラーのありがたさを毎日噛み締めています。クーラーのもので長時間過ごすのは良くないことも実感しました。体調を崩したからです。風邪や、長時間日光に当たって調子が悪くなった時とはまた違った、二度と経験したくない、言葉では伝えられない違和感がありました。上京して数ヶ月、まだ慣れないことばかりですが、何事も経験だと思って毎日生活していきたいです。(荒井涼花)

**ハ**ソコンは、今や学生や社会人など多くの人々に欠かせない便利な道具になりました。昨今はシステムのデジタル化が止まりません。私は大学に入学してから、両親にも言われるほど、ほんとうにパソコンをよく使うようになりました。大体は慣れましたが、生活スタイルが一変したことにただ驚くばかりです。そんな中で、息抜きも大切だと改めて気づきました。スマートフォンやパソコンの画面ばかり見ていると疲れた時には、自然に触れてゆっくりすることも良いかもしれませんね。(下坂愛梨紗)

**私**はこの春に上京し、一人暮らしをスタートさせました。そのため今まで以上に自己管理に対する意識がとて強くなりました。また、大学では高校の時とは学びが異なり、自分の興味のある分野を優先して学べるようになったことから、以前よりも進んで学習するようになりました。さらに、ミコタマの編集にも関わり、新たな挑戦をしてみるなど短期間でとても貴重な経験をさせて頂き、充実した大学生活を送ることができています。(祝ちとせ)

**も**っと時間があればいいのに！新生活が始まってからいつも考えます。高校生の頃は、早く大人になりたい、早く一週間が終わってほしいといつも思っていました。しかし、大学生になってからはオンラインの授業に加え、対面の授業もやらなければいけなくて、一週間なんてあっという間に終わってしまい、高校生の時に比べて時間が足りないと思う日々です。もし、高校一年生の私に会えるなら、もっと美術館を巡ったり、昼寝をいっぱいしたり、暇を満喫した方がいいよと伝えたいです。(山崎柚夏)



# キャンパス自然観察だより

帝京大学八王子キャンパス内の自然を観察し、普段は気がつかない変化や魅力を探ります。



完成した梅シロップと梅干し  
(2021年8月23日)



梅の収穫  
(2021年6月9日)

## キャンパスの「梅仕事」

帝京大学八王子キャンパスの中には梅林があります。毎年5月下旬になると、青々とした梅の実が鈴なりに実ります。

梅は、中国から伝えられたと考えられています。江戸時代の農業学者たちは、農民に梅の栽培を奨励しました。梅の実を、葉にもなり保存食にもなる梅干しにして販売すれば、農民の生活に役立つと考えたのです。また梅の実に含まれるクエン酸は、体内に蓄積された乳酸を分解する働きを持っています。『梅』有岡利幸著 法政大学出版社 1999年に詳しく掲載されています。)

今回は教育学部教授の草野いづみ先生に御協力頂き、梅の実を収穫して梅シロップと梅干しを仕込んでみました。仕込みから約1ヶ月後、梅の風味と甘さがいっぴいの梅シロップと、見るだけで唾が出てくるほどの酸っぱい梅干しが完成しました。「梅仕事」を通じて、キャンパス内の自然の多様さを知ると同時に、キャンパスの自然を育んだ多摩の自然の偉大さも実感しました。来年の梅の収穫も楽しみです。



### 帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学八王子キャンパス周辺の自然、文化、歴史、現在に関する魅力を、帝京大学総合博物館が調査したことをもとにして広く社会に紹介するプロジェクトです。

「赤駒を 山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(万葉集)

放牧してある赤駒を捕まえることができなくて、険しいという「多摩の横山」を(防人に赴任する夫に)歩かせてしまうことになったよ。

この歌は、奈良時代に編まれた「万葉集」の歌の一つです。「防人」として武蔵国を離れて九州に赴任する夫を妻が気遣った歌です。「多摩の横山」と呼ばれる場所は、ちょうど帝京大学八王子キャンパス周辺にあたります。丘陵が、横に長く連なる様子を当時の人々は「多摩の横山」と呼びました。万葉集の頃の「多摩の横山」の面影は、現在は少なくなりつつあります。ですが、しっかりと目を凝らしてみると過去の面影を感じ取ることで残っている場所が残っています。そして、それらの場所には過去から現在までの人々の営みが連続と続いています。このプロジェクトは「多摩の横山」に残された自然や文化、歴史、そして現在の人々の営みに光を当てて紹介するものです。普段は何気なく通り過ぎて気がつかない魅力あふれる「横山」ならぬ「多摩のヨコガオ」を探して記録し、社会に発信していきます。

